

合った上で、主治医と、どこでどのように最期を迎えるかを含めた話し合いを行った。両親は、できる限り本人の希望である自宅で介護を続けるが、看取りは困難であると結論に至った。ケアマネージャーを中心として社会支援を受けながら、死にゆく祖父を自宅で介護することが日常となる中で、両親は自宅で最期まで看られるのではないかという気持ちに変化した。その後、緩和ケア診療所に支援を受けながら、在宅での看取りができた。【考察】患者の家族の気持ちは常に変化するものであり、適切なタイミングで支援すること。また、死にゆく人にとって、どのような関わりが大切かということに関して家族の合意形成が重要である。家族が看取る意思を持つことで、感謝しながら、共に時間を過ごすことができ、死後も肯定的に自己の関わりを振り返ることが可能である。しかし、自宅での看取りの家族に掛かる負担の大きさは予想以上に大きい。看護師として、看取りを含めた在宅移行の調整には、家族間の合意形成が可能であるかアセスメントすることが重要であると考ええる。

データ出典

1. 厚生労働 HP: URL

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/deth5.html>

<セッション2>

口 演

1. NICU で看取る家族を支えるケア

鷹巣 綾子, 倉澤 玲子

(群馬大医・附属病院・看護部)

医療技術や医療機器の進歩によりハイリスク児の救命率は高まってきているが、予後不良と診断され救命できない児がいることも現実である。親にとって子どもを看取ということは、はかりしきれない苦痛や葛藤があり、家族をサポートすることが重要になる。今回、18トリソミーのため生後26日目に死亡した児の家族が、出生から看取りまでの困難な状況の中で悩み苦しんでいた症例に対し、親として罪悪感や無力感という気持ちを抱えていた母親だけでなく、母親を支える父・祖父母・同胞といった、家族全体を視野に入れたケアを行ったので報告する。

医療機器に囲まれている児を見て、元気に生んであげられず申し訳ない気持ちや、親として何も出来ないという気持ち、状態の変化に伴い揺れ動く気持ちなどを傾聴し寄り添った。また、両親へのケアの参加を促し、おむつ交換や清拭などの育児ケアを一緒に行った。希望を考慮しながら親として出来ることを提案し、児への愛着を深めていくと共に、親自身で出来ることを見つけ親役割を獲得していった。そのような関わりを通して、母親は、わが子に対して生ま

れてきてくれたことへの感謝の気持ちや、愛着を深める言動がみられるようになった。さらに、祖父母・同胞の面会の配慮、児と家族が過ごしやすい環境づくりを行い、残されている時間の中で、児と家族と一緒に過ごす時間が持てるように働きかけを行った。

この事例を通して、看取ることの喪失の悲しみに対するケアだけでなく、家族が児の誕生から、別れの時までを共に過ごす過程が大切であることを経験した。また、両親を支える祖父母や同胞の存在が家族全体を支え、そして、医療スタッフが家族全体を支えることによって、家族で乗り越えていく力を引き出すことに繋がったと考えられる。

2. 未成年の子どもを持つがん患者に看護介入した看護師への実態調査

森村早百合, 西巻 正枝, 五十嵐美幸

尾内 麻里, 新井 友子

(伊勢崎市民病院 看護部)

【はじめに】私は、未成年の子どもを持つがん患者に対して、どのように接すればいいのか戸惑うことがある。A病棟看護師からも、どのように声をかけてよいかわからないとの声が聞かれた。がん患者の若年化により、未成年の子どもを持つがん患者の増加が予測される。そこで、今回A病棟の看護師が、未成年の子どもを持つがん患者に対して看護介入を行っているのか、その際にどのような困難を感じているのかを明らかにするために実態調査を行った。

【用語の定義】看護介入とは、未成年の子どもの有無やその年齢等の情報収集を行い子どもとの関係や子どもへの病気の告知について困っている事や悩んでいる事がないか確認する行動。【方法】プライマリナーズの経験がある臨床経験3年以上のA病棟看護師22名を対象に、質問紙によるアンケート調査を行った。単純集計をし、自由記載は類似した内容をカテゴリー化した。倫理的配慮は、施設の倫理委員会の承認を得た。【結果・考察】A病棟看護師の約55%が看護介入の経験があった。看護介入で困難に感じた事は、未成年の子どもを持つがん患者に対しての「声かけ」「対応方法」の2つのカテゴリーに分類された。「声かけ」では、子どものことを「どう聞いて良いか悩んだ」(7件)、「どう切り出して良いのか悩んだ」(2件)などの意見があり、看護師は患者の話を聞きながらも声かけの方法で悩んでいる事がわかった。「対応方法」では「家族関係にどこまで介入してよいか分からない」(4件)など不安や迷いを抱えている事もわかった。現在、未成年の子どもを持つがん患者は少数であり、看護介入をする機会が少ない。そのため、困難に感じている看護師たちがその情報を共有し、多職種とカンファレンスなどを行う事で具体的な声かけや対応方法について見出す事ができると考える。その方法を看護介入に活かす事が重要である。